



東国大校での特別講義の参加者と記念撮影

じる遺品整理の実態についての講義を行った。また、6月にはソウル市にある仏教系の名門大学である東国大校において、同様の特別講義を行った。吉田社長が積極的にこのような講義や講演を行うことにはもう一つの意味がある。多くの孤立死を見てきた立場から、孤立死する人たをなくしたいという思いだ。一見矛盾するようにも思えるが、遺品整理のビジネスの現場から、孤立死を減らしたい、そして無縁社会の進展を黙って見ているわけにはいかない、という純粋な思いだ。

韓国葬祭業界の反応

さて、遺品整理に対する韓国の葬祭業界の反応はどうだろうか。これについては、おそらく日本において事業をスタートした当初と同じ反応と言えるだろう。「確かに遺品の整理は必要である。しかしながら、それは遺族がやることで専門の業者が行う



東国大校は仏教系の大学で1世紀の歴史がある



講義での吉田社長



キーバースコリアの金石中代表

サービスではない」。これが大方の反応と言えるだろう。吉田社長は「日本において私が事業をスタートした際も、多くの葬儀業者は否定的な受け止め方をしていた。しかし今日、遺品整理は日本の社会に無くてならないサービスとして認識されている。韓国においても近い将来、日本と同じようなことが起こるだろう」と語る。

高齢社会の進展やそれに伴う人間関係の変化が、遺品整理というニーズを拡大させてきた。もちろん、この傾向は今後も続くことになるだろう。そんな中でキーバースのチャレンジは隣国韓国へ拡大しつつある。



特別講義には約60名の参加者が熱心に聞き入った